

クリストフ アンドリュー シブニエヴスキー

ポーランド出身

筑波大学 人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻 博士課程

「塾学校について」

来日してから 8 年間を渡って最初に不思議だと思った事は日常になり、それら多くは次々有意な感想もないほど普通になってきました。一方、8 年か 16 年が経っても理解できなさそうな幾つかの日本の社会と文化における概念や習慣などもあります。子供を放課後や週末に塾学校に通わせることはその一つです。

ポーランドでは塾学校の概念もありません。何らかの科目で優位的に衰えている場合のみ、問題の科目を家庭教師に教えてもらうことがあります。普通に勉強ができる子供（まして勉強が優秀な子供）にそうするのはだれも想像したこともないでしょう。なぜなら、一般的な学校で行われている教育のプログラム（学内の勉強、部活動と宿題を含めて）はすでに、子供の限界とニーズを配慮の上、計画されているからです。不要にそれ以上の勉強をさせるのは、成績にいい影響を与えて他の場面の様々な問題の原因になるでしょう。

子供には遊びの時間も必要です。遊びでも貴重な勉強だとおもいます。幼い子供たちは家庭ごっこなどで大人を真似したり、グループで決めたルールに従い遊んだり、初めての社会性スキルを取得していく。または、玩具で、遊んだり絵をかいたりなどを通して自分の想像力や積極性を上げていく。中学生や高校生は友達とバイトしたり、映画館かカラオケに行ったり、趣味に励んだりして親や教授などの大人からはなれて行動することを通して独立性をはじめて体験する。塾に通わせて、上述の経験が少なくなるだけでなく、子供は勉強をする間に仲間で遊んだり、思い出を作ったり絆を強くした

りしていくことにより、仲間に置いて行かれている感じがするでしょう。または、仲間との「最近の映画を観に行ったこと」「楽しんだゲーム」などの話に参加できないことをきっかけにして、その子供と仲間の間の心理的距離が延びるでしょう。

人間とは社会の一員として生活していく存在です。そのため様々な社会的スキルや社交性を習得せねばならないものです。人は生まれてから成人になるまで想像もしにくいほど複雑な発達過程を通じ、無知の赤ん坊から社会人に変化していく。その過程に余計に干渉すると、個人も社会も様々な問題の発生の可能性が上がるでしょう。数学か英語を習う時間はいつでもありますが、社交的なスキルなどを得る期間は生物的に定められています。